

美しい風景と人の交流で町おこし

Pick Up

北海道 東川町

生き生き輝く未来をとらえた「写真の町」

北海道東川町は、雄大な大雪山国立公園を有する美しい自然に恵まれた町で、二つの温泉を拠点とした観光、稲作を中心とする農業、そして高品質な家具を生産する木工業で知られてきました。しかし昭和六十年、これらの産業に陰りが見え始めたのをきっかけに、町は全国に向かつて「写真の町」を宣言。写真映りのよい人・環境・物づくりをめざしてユニークな活動をスタートさせました。今回は、「一村一品」に代わる、「一村二文化」によってまちおこしに取り組んでいる事例として、粘り強く「写真の町」づくりを推進し、ついに全国にその名を知られるまでになった東川町にスポットを当てました。



お問い合わせ先
東川町役場 企画総務課 TEL 0166-82-2111
http://www.town.higashikawa.hokkaido.jp/

大雪山国立公園を抱える美しいまち東川町

東川町は、北海道のほぼ中央部に位置し、大雪山国立公園の雄大な自然に囲まれた人口約七千七百人の町です。総面積は約二百四十七平方キロメートルで、東は大雪山連峰、南は美瑛町と東神楽町、北と西は旭川市と接しています。内陸盆地にあるため、夏期は三十度、冬期はマイナス二十度を記録するほど寒暖差がはつきりしていますが、比較的冷涼で住みやすい気候です。車で旭川市から三十分、旭川空港からも車で十分と近いため、東京からでも二時間程度で東川町に到着できます。町域には、石狩川水系・忠別川を利用し

た北海道電力株式会社の新忠別発電所（国の重要電源開発地点に指定、水力・最大出力一千万ワット）が建設され、平成十八年十月から営業運転を開始する予定となっています。肥沃な土地、美しい景観、豊かな森林資源に恵まれ、昔から「お米と観光と工芸の町」として知られてきた東川町。大雪山の清らかな水と寒暖差の激しい気候に育まれるおいしい米と野菜、天人峡温泉と旭岳温泉の二つの温泉地を中心とした観光、高級伝統家具の生産地として全国的に知られる木工業が町の産業を支えてきました。また日本の産業全体のあり方が大きく変化し、



東川町の田園風景
背景には「旭岳」を主峰とする大雪山連峰の山々が横たわる。

これから日本が世界の中でどのような役割を担うのかを問われ始めたのです。この曲がり角の時代に、東川町は未来の町の姿について考え始めました。

観光客が減っていく…町はあるべき未来像を模索

産業の陰りの象徴として、観光客の減少がありました。観光バスの乗客数が一台平均五〜六人になり、ついに定期便が休止されるまでに至りました。「観光客を増やすために、いろいろプランを検討しました。何かイベントを行えばお客さまを呼ぶことはできるだろうが、それはその場限りの「点」にすぎない。「線」となる継続性のある企画がないかと協議を重ねたのです。また昭和五十九年は、東川町に開墾の鍬がおろされて満九十年になり、十年後に町はどのような未来へを迎えるのかという未来への課題もあり、外部の企画会社

にも協力を依頼しました」と当時を振り返るのは、東川町役場・特別対策室長の山森敏晴さん。そんな中である企画会社から提案されたのが、写真を切り口とした企画だったのです。観光は「光を観る」と書き、その「光」とは景観や歴史的遺産など光り輝く価値あるもの。また現地の人のとの出会いの喜びも「光」である。東川町で本当に価値あるものとは何か、写真を切り口にそこから観光を考えていこうというものでした。

「東川町には大雪山国立公園という素晴らしい被写体がある。それに観光客の誰もがカメラを持っている。写真はみんなが簡単に撮れるもので、しかも大変奥が深い。これはいい



東川町役場 特別対策室 室長 山森 敏晴さん

の整備・保全」 「物をくろう（作物や木工品）」などの基本的な指針がまとめられました。

写真が結ぶ出会いの祭典「東川町フォトフェスタ」開催

と、当時の中川音治町長が目をつけました。もとより、観光だけでなく地域を活性化させるためには住民が自信と誇りを持つ必要があると考えており、そのための切り口として何か一流のものが欲しかったのです。写真は大衆性と芸術性を兼ね備えており、よくマッチしていたのです」と山森さんは語ります。

東川町は、「写真の町」宣言をした同年七月、その理念を実現するためのイベント「東川町フォトフェスタ（正式名称・東川町国際写真フェスティバル）」を開催しました。国内外の優れた写真作家を表彰する「東川賞」の授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、誰もが参加できるアンデパンダン展などが行われ、全国ならびに海外からたくさんの方が町を訪れました。またゲスト写真家の作品スライド上

映とジャズライブの共演、現代美術家や詩人・演劇家によるインスタレーションやパフォーマンスなど、写真と異種文化が出会う新しい試みも実施。さらに初心者を対象とした写真教室、写真による自然観察講座、町民写真展など、芸術とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広く写真文化の魅力を伝えるイベントになっています。

別賞の四賞で構成されていますが、この中で海外作家賞の制定は「東川町フォトフェスタ」の海外からの注目と評価を高め、国際交流の場を生み出しました。昭和六十年に始まった「東川町フォトフェスタ」は、それから毎年夏に二カ月の会期で開催され、各種イベントに約二万人が訪れています。しかし、当初は必ずしも順調ではなかったと山森さんは振り返ります。

中川町長(当時)の英断と「写真の町」を宣言

写真を切り口としたまちおこし案は、すぐに観光客が増えるなど産業振興に直接結びつくものではなかったため、役場の中でも賛否両論がありました。しかし中川町長の英断で採用が決定。「写真映りのよい町」をテーマに、写真に撮りたくなるような「人になろう（教育の振興）」「町をつくろう（環境

組む町にはかなわないが、若い文化に若い町が取り組めば、新しい伝統をつくっていきける…そんな意気込みが「写真の町」宣言には満ちています。

写真の町宣言

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」それぞれの出会いの中に感動が生まれます。そのとき、それぞれの迫間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために、四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった「写真映りのよい」町の創造をめざします。そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。1985年6月1日 北海道上川郡東川町



「東川町フォトフェスタ」で行われているワークショップ

た。写真は感覚的なもので、誰にでもすぐわかるわけではない。職員も写真の見方や文化を普及させようという余裕などなく、仕事を黙々とこなすだけだったというのが実情でしたね」

「住民にどんな得があるのか」など批判の声も

「写真の町」宣言と「東川町フォトフェスタ」には、当初から様々な意見がありました。中でも多かったのは、「大切な町のお金を使ってプロの写真家に賞を贈り、住民にどんな得があるのか」というものでした。確かにイベント期間中は外部から人が大勢集まって賑やかになりますが、それが直接利益につながるのはい部の商店くらいのもので、町や住民には目に見える利益がありませんでした。批判はしないまでも、「町が勝手にやっている」



東川町観光協会 会長 浜辺 啓さん

住民の声や提案を積極的に活用

「写真甲子園」とともに、平成十二年の第十五回「東川町フォトフェスタ」でのレセプション方式の変更もまた大きな転機となりました。「東川賞」の『受賞を祝う集い』では、従来町内にある店に飲食やサービスを任せていました。しかし「写真の町企画委員会」で住民たちが話し合い、この年から農家の主婦など住民の有志が料理を用意し、もてなすことになったのです。それまで「東川町フォトフェスタ」の各イベントは、ほとんどが企画会社の提案によるもので、写真愛好家



「写真甲子園」本戦は、東川町をメインステージに熱い戦いが繰り広げられる

ほどの意識もなく、無関心な住民も多かったのです。また「写真の町」宣言をした往時は、写真関係の団体などから「写真をまちおこしの道具に使うのはけしからん」といった反発を受けました。「東川町フォトフェスタ」開催に協力を願うため、企画書を持ってカメラメーカーなどを回った時も、けんもほろろの対応だったといえます。「ある写真関係の団体に後援名義書という一種のステイタスをもらいに行きましたが、写真で金儲けしようとしていると言われて名義書をくれなかった。フォトフェスタ開催三年目

『写真甲子園』開催が転機となり町民の意識が高まる

若い人たちをターゲットに「写真甲子園」を開催

高校生たちによる全国写真コンテスト「写真甲子園」がスタートしたのは、平成六年の第十回「東川町フォトフェスタ」からです。そのきっかけとなったのは、写真雑誌の「CAPA(学習研究社)」

にやつともらえましたが、初めの頃はいろいろな障害がありましたね。最も難しかったのは、毎年継続させることでした。批判はありましたが、小さな町から情報を発信することに意義があると思い、職員総動員で取り組みました」と山森さん。そして十年目に転機がやってきました。

東川賞について



毎年、東川賞審査会が海外および日本全国から優れた活動を行う写真家を選んで各賞を授与。その写真家を東川町に招待して顕彰しています。その特徴の第一は、日本で初めての自治体による写真作家賞であること。第二は、日本の写真作家賞がすべて年度賞であるのに対し、国内と新人作家賞については作品発表から三年までを審査の対象とし、作品の再評価への対応に努めていること。そして第三は、日本で海外の写真家を定期的に顕彰しているのは東川賞のみで、あまり知られていない優れた海外作家を紹介してきたことです。

が主催していた「フォトオリンピア」という写真イベントでした。毎年そのフィールドに、東川町が使われていたのです。「この雑誌の読者は高校生です。そこで『東川町フォトフェスタ』の中で若い人たちをターゲットとしたコンテストをやろうということになり、高校生なので『写真甲子園』と命名したわけです」と語るのは、当



「写真、大好き！」 東川第一小学校の廊下にて、子供たちと写真絵日記

ボランティアスタッフとして住民も支援

住民たちの意識の盛り上がりは、スタッフとして関わる数の多さに表れています。「写真甲子園」では、一般公募、女性団体、地元の高中生、専門学校生や地元企業。「東川町フォトフェスタ」ではイベント運営を行う写真の町企画委員やホームステイボランティアの会。このほか、「東川町フォトフェスタ」と連動して実施する「どんとこい祭り」にも、町内企業や職場など多くの町民が関わり、期間中だけでもポ

ランティアは五百人を超え、数も年々増加しています。さらに「写真甲子園」や「東川町フォトフェスタ」のボランティアスタッフとして大学生などが三十名ほど駆けつけてくれます。「若い人たちは年をとって社会人になってもずっとつながっていきますから、イベント継続の大切なパワーになる。住民の意識アップとともに、若い人たちに『写真の町』を強くアピールしたことが、写真甲子園の大きな意義です」と、浜辺さんは熱く語ります。また、特別対策室長の山森さんも「今

時「写真の町企画委員会」の委員長を務めていた浜辺啓さん。浜辺さんは現在、東川町観光協会の会長でもあります。このコンテストは、全国の高校生を対象に、各校共同制作による作品を募集し、全国を八ブロックに分けて郵送応募による予選を行い、その中から優れた作品を寄せた十四校を選抜。選抜された各校三名の代表選手と顧問の先生を招待し、東川町・美瑛町・上富良野町の三町をフィールドに本戦大会を行うというものです。本戦は三日間で、三町の中で撮影した組写真を、各校が審査員を前にステージでプレゼンテーションします。審査委員長

は写真家の立木義浩氏。その他数名の審査委員が、公開で作品へのアドバイスをともに厳しい審査を行います。「第二回目は、全国六千校に参加を募りました。その時の参加校は百六十三校。年々盛り上がり、今年は一、二百二十四校が参加しました。本戦では高校生たちが町内に滞在して撮影などをするので、その時に住民たちとのふれあいが生まれるのです。カメラを持って町内を巡る若いパワーが、住民の写真への意識をぐんぐん高めてくれましたね」と浜辺さん。「写真甲子園」が、「写真の町」への住民の参加意識を目覚めさせたのです。

「写真の町」宣言や「東川町フォトフェスタ」開催後、しばらくは批判の声が上がったり無関心な住民が多くなりましたが、「写真甲子園」の開催を転機に住民の参加・協力意識が高まりました。また外部の人々との交流から、東川町民としての誇りも芽生えてきました。「成果2」交流人口の増加と町の知名度がアップ 「東川町フォトフェスタ」を中心に、日本全国や海外から

「写真の町」づくりのための数々の施策は、昭和六十一年に「第二回日本イベント大賞・特別賞」、昭和六十二年に「第一回農村アメリティコンクール・優秀賞」、平成二年に「日本写真協会・功労賞」、平成七年に「日本写真家協会賞」、平成十二年に「北海道地域文化選奨・特別賞」を受賞するなど、写

年でフォトフェスタも二十二回目になり、行政にも住民にも『写真の町』を推進していこうという気持ちが定着しました。暗中模索で歩んできましたが、とにかく継続できた。そして、フォトフェスタを実施することが当たり前となりました。現在、当初からの企画会社は外れ、行政と住民だけで協力し合いながら、町を盛り上げようと頑張っています」と話してくれました。「写真の町」を核とした成果とさらなる発展に向けた課題と展望

「成果1」住民意識の向上

「成果3」数多くの優秀な写真作品は町の財産

毎年、「東川賞」受賞作家の作品は「東川コレクション」として町営の「東川町文化ギャラリー」に永久収蔵され、常設企画展などで町民や訪れる人々に公開されています。また町外の公共文化施設の展覧会、全国の美術館との写真展交流などにも活用され、町民の財産となっています。

「成果4」各界から様々な賞を受賞

「写真の町」づくりのための数々の施策は、昭和六十一年に「第二回日本イベント大賞・特別賞」、昭和六十二年に「第一回農村アメリティコンクール・優秀賞」、平成二年に「日本写真協会・功労賞」、平成七年に「日本写真家協会賞」、平成十二年に「北海道地域文化選奨・特別賞」を受賞するなど、写

東川町は米と工芸の名産地

東川町では、大雪山の自然が長年かけて創りあげた天然ミネラル水(地下水)を全家庭で生活用水として利用できます。そして、この名水と肥沃な大地、寒暖差の激しい気候から生まれる米は品質・食味ともに、北海道屈指の存在となっています。

また、豊かな森林資源から生み出された家具は全国で高く評価され、町の商店街に掲げられた木彫看板は、工芸の町の象徴とも言えます。近年では、家具づくりのノウハウを取り入れた個性的で感性豊かなクラフトグッズが、新しい工芸品として脚光を浴びています。



大雪旭岳源水を求めて、町外から訪れる人が後を絶たない



町内の商店街に掲げられる木彫看板が、なんとも東川町らしい



静かで広々とした田園風景に隣接した「優良田園住宅」

真界に限らず各界から認められ、高い評価を受けています。

課題と展望 未成熟な日本の写真文化

日本では写真文化というものがまだ未成熟で、他の文化と比べて軽視されがちなどころがあります。東川町としては、今後も各種のイベントや活動を通して、写真文化がきちんと位置付けされるよう支援していきたいと考えています。

課題と展望 文化ギャラリーの活用

「東川町文化ギャラリー」では収蔵している「東川賞」受賞作品などにより、随時写真



東川町 企画総務課 政策室 次長 杉山 昌次さん

課題と展望 3 大学生・社会人対象のコンテスト

の企画展などを行っています。文化ギャラリーは敷居が高く敬遠されるなど、必ずしも有効活用できているとは言えません。たかさんの人が気軽に立ち寄り、もっと写真に興味を持ってもらえる方策を検討しています。

課題と展望 4 職員の異動問題

役場では職員の職場転換がつきものです。しかし毎年開催される「東川町フォトフェスタ」などの取り組みでは、町の担当者が数年で変わってしまうと、蓄積された人間関係や外部の業界に関する知識も

町の景観美化をはかりながら 移住・定住化を促進、新たな展開

山林の乱開発で美しい景観がピンチに
「写真の町」づくりを熱心に進めてきた東川町ですが、一方で肝心の美しい風景が近年になって脅かされてきました。豊かな自然に憧れ、週末のセカンドハウスを持ちたいという人が増えて、町外の業者が営利を目的に山林を乱開発したのです。また自然を汚したり平気でゴミを投棄する人々が

増えてきました。「写真映りのよい町をめざしているのに、町自体が汚れてしまつてはどうにもなりません。そこで町では平成十一年から策定委員会を設け、町民会議、子供会議(小・中学校)と一緒に環境保全についての検討を始めました。そして平成十四年に開発規制を施行。乱開発を発見したらすぐに報告するようにしました。またゴミの有料化や、各地域

に暮らす住民の方々の中から『美しい風景づくり指導員』を任命して、月に四回、エリアを巡って乱開発やゴミ投棄を監視するパトロールを開始しました」と語るのは、企画総務課政策室次長の杉山昌次さん。同じく平成十四年には、景観づくりに貢献した人を表彰する「美しい風景づくり賞」もスタート。そして平成十七年には、仙台以北で東川町は、国の景観法に基づく「景観行政団体」の第一号に認定されました。

東川町ならではの街並・住宅づくりを推進

東川町では、市街の花壇の

植栽、企業用地の緑化などから、住宅の屋根や壁の色に至るまで、街の景観に気が配られています。街並・住宅づくりについて、産業振興課長の長原淳さんはこう話してくれました。



東川町 産業振興課 課長 長原 淳さん

「これは移住や定住のための支援策でもあるのですが、個人の住宅を新築する際、配置や屋根形状、外壁の色など一定条件を満たす場合、カーポートなど付属建物の建築費に五十万円を補助しています。また東川町産の家具を二十万円分補助しています。」
町ではさらに、民間業者がアパートを新築する場合に二戸当たり百八十万円の助成金を出す制度や、町が認定して民間業者が造成・建築する「優良田園住宅」という新住宅エリアを設けるなど、移住や定住化に積極的に取り組んでいます。

大雪山からの天然ミネラル水を全世帯地下水で取水できまので、子育てに優しい環境であると認識していただいているのでしょうか」
写真を切り口とした東川町のまちおこしは、人口が何千人増えたとか、経済効果は何億円だとか、従来のように数字を基準に言い表すことはできませんが、「写真の町」宣言からすでに二十年以上経ち、進行していた過疎化からは確実に脱却しました。住民の町に対する愛着や誇り、町全体の活気や輝きなど、むしろ数

字で計れないところに本当の効果が表れているようです。「外の人々との交流の広がり、美しい景観や環境づくりは、これから三十年、五十年先にもますます輝きを増してくると思います。本当に恩恵を受けてるのは自分たちではなく、子供たちの世代なのだという息の長い取り組みが『写真の町』ではないでしょうか。そんな意識でこれからも自信を持って活動を続けていきます」と杉山さんと長原さんは口をそろえます。
大雪山からこんこんと湧き出る水同様、東川町では今日もまちおこしのアイデアが枯れることはありません。

写真を切り口として 町民福祉の向上をめざします



東川町長 松岡 市郎さん

「いかに多くの人と会うかが、行政のポイントである」というのが私の持論です。多くの町民の方々、町内外の様々な団体・企業など、出会う人が多いほど新しい輪が広がり、新しいチャンスが生まれます。そしてそれを活用していくのが行政の仕事だと考え、元気ある職員が日々知恵を絞っています。

東川町が「写真の町」宣言をしてから二十二年。「東川町フォトフェスタ」などの活動を通して、町と外部との交流は活発になりました。それによって町の人たちは生き生きとしてきました。私も町長として様々な分野の方とお会いすることができました。これも「写真」という切り口のおかげであり、普通なら会えない人とも「写真」をきっかけに話し合う機会を持てたのです。現在では「写真の町・ひがしかわ」の名が全国的に知られるようになり、沖縄県の名護市や神奈川県相模原市などの自治体が視察にみえて、「写真」を切り口とした町おこしに取り組んでいます。また韓国の江原道からも視察にみえており、今後はイベントの連携も検討中です。さらに東京では「東川コレクション」の写真展を開催するなど、東川町はますます注目を集めており、改めて「写真」による効果を実感しています。

東川町では(1)繁栄(2)安心安全(3)幸福の実感をテーマに、町の活性化と町民福祉の向上に取り組んでいます。平成十七年には(財)電源地域振興センターの振興相談事業を活用し、データは「東川町集客型まちづくり方策基礎調査」としてまとめられました。そのデータを見ると、東川町がいかに美しい自然に恵まれ、交通アクセスも良く、周辺に医療などの諸施設が充実しているかがわかります。このような好条件をしっかりと見直し、「写真」によって生まれたチャンスを活用して、これからは生き生きと輝く町づくりをめざしてまいります。